

復活の主日 日中のミサ  
ヨハネ 20・1-9

2014.4.20 9:30 ミサ  
柴田 潔(イエズス会司祭)

**導入**

ご復活おめでとうございます。昨晚受洗された6名の新しいお仲間とご復活のミサをお祝できるのを嬉しく思います。今日の福音では、イエスの亡きがらを探し始めるところから復活が明らかになる様子が描かれています。私たちも、復活がどんなことか？ また、その喜びを人々に伝えられることを願ってミサを始めましょう。

**説教**

主が復活されたことは、どのようにわかってきたのでしょうか？ 今日福音に登場する3人の行動（アクション）から考えます。

最初のきっかけは、マグダラのマリアのアクションです。マリアは、「一目でいいからイエスの亡骸に会いたい」と、まだ暗いうちに、一人で墓に出かけて行きました。イエスの衝撃的な死に方を考えると、若い女性が明け方出掛けるのは相当な勇気があることです。勇気というか、居ても立っても居られないほど、遺体でもいいからイエスに会いたい、イエスへの愛がありました。この愛は、高価な香油を犠牲にしたときと同じです。イエスへの愛が全ての始まりでした。

けれども、マリアは、墓の石がとりのけてあるのを見ても、まだ主が復活したとは思っていません。空の墓を見て、すぐに何をしたかという、わけも分からず、ペトロのもとに走って行きました。ペトロと一緒にヨハネは、話を聞いて飛び出して一緒に走りました。私なら先に着いたら喜んで中に入りますが、ヨハネは、ペトロへ気を使ってお墓の中に入らず、外で待っています。ヨハネは、中が整頓されているのを見て直観的に、遺体が盗まれた訳ではないと悟ります。「彼(ヨハネ)はこれを見て信じた」とあります。丸めてあった亜麻布を見て、主が生きている“しるし”だと分かりました。この3人は、主が復活されたことを一人で証した訳ではありません。でも、3人がそれぞれ大事な役割を果たして、復活が解き明かされることになります。どれか

一つ欠けても、イエスの復活は見逃されていました。

もし、マグダラのマリアが、墓の石が取りのけられているのを伝えなかったらどうなっていたでしょう？ 墓は空のまま放置されていたでしょう。ヨハネもペトロも墓へ行くことができなかつたはずです。また、先に着いたヨハネがペトロを待たなかつたら、ペトロはカヤの外におかれて、ペトロの教会の中での立場は変わっていたかもしれません。3人の関係プレーがなければ、イエスが死んだあとどうなったのか、追及もされなかつたかもしれないし、追及のされ方も変わっていたでしょう。折角イエスが復活しても誰の救いにもならなかつた・・・ そんな結末になつてもおかしくないほど、3人の働きは大切でした。この関係プレーは、3人だけでなく、当時の弟子たちを中心にどんどん広がって、瞬く間に信者の数が膨れ上がりました。同じことがわたしたちにも言えるでしょう。「イエスがわたしたちを救うために復活された」。体験はわたしたちの関係プレーで伝わっていきます。

では、わたしたちは復活されたイエスを十分伝えられてきたのでしょうか？ 特に、東日本大震災に遭われた人たちに伝えられたのでしょうか？

私は山口で8回ボランティアを引率して、百人ちょっと参加しました。これまでに山口名物のフグ雑炊、瓦そばを作つて仮設住宅で振る舞つたりしました。失敗の経験もあります。山口名物のいろいろを学童保育で作ろうと思つて、本物と食べ比べたら面白いんじゃないかと思つて、新山口の売店で買つていたら新幹線が行つてしまったこともあります。3月はそんな失敗をしないように時間を気にしながら集合しました。中学生6名、高校生2名、幼稚園の3人の先生たち大槌町にボランティアに行つてきました。今回も貴重なお話しを伺いました。津波に遭つてたくさんの仲間が流されるのを目撃した漁師さんは、自分で作つた紙芝居を使つてこう話してくれました。

「津波の後、たくさんのところで火が上がつた。一晩中、プロパンガスのボンベが爆発する「パーン、パーン」という音が聞こえた。火が消えたら行方が分からない人を探そうと思つていた。でも、火がおさまつたのは津波から一週間後だった。燃える物はすべて焼き尽くされて火は消えて、一緒に町は跡かたもなく消えていた。お寺の鐘も溶けていた。鐘は1,600度以上の高熱でないと溶けない。遺体は普通1,000度～1,200度で30分かけて火葬場で焼く。でも、津波の後の火事は1,600度で1週間燃えてた。だから遺灰さえ残つてない。今でも遺体を探したくても探せないで悔しい思いをしてる人がたくさんいるんです（大槌町の死者853名、行方不明者431名 合計1,284名は人口の

8.4%)」。

福音の中では、3人から始まってイエスの復活が明らかになっていきました。でも、東北全体では2,633名の行方が分かっていません。この現実には私たちはどう向き合ったらいいのか？ 主の復活を伝えられるのでしょうか？ 今回、ボランティアに参加したある中学生はこう書いています。「初めて被災地に行って何か自分にできることを探そうと思った。でも、見つからなかった。次に行く時には、自分ができることが見つかったらいいと思う」。彼の体験は、こう言い換えることができるように思います。「僕はまだ、イエスの復活をどう伝えたらいいのかまだわかってない。でも、必ず探し出したい」。この熱意は、マグダラのマリア、ペトロ、ヨハネがイエスを探した姿と重なるように思います。「何とか探し出したい。見つけたい」。この熱意が教会を2千年燃え立たせてきたのではないのでしょうか？

イエスに出会ってできる限りのことをした弟子たちに私たちも倣いましょう。救いを求めている人にできる限りのことをすることを願って復活の主日のミサを続けましょう。